

プトゥンと『入菩薩行論解説[細疏]』

斎 藤 明

I 現行のチベット大蔵経・テンギェルには、著者・訳者不明の『入菩薩行論解説[細疏]』(以下『解説』と略す)と呼ばれる貴重な注釈文献がふくまれている¹⁾。この文献が貴重なのは、一つには、それがサンスクリット、チベット語訳、モンゴル語訳、漢訳に伝承される『入菩提(菩薩)行論』の現行本(10章本)に対する注釈ではなく、現在では9世紀初頭のペルツェク訳として、それも敦煌出土のチベット語文獻の中にのみ存在が確認されている同論の初期本(9章本)に対する唯一の注釈であるという事実による。とともにまたこの文献が、とりわけ思想史的にみて重要であるのは、その内容が中・後期の中観思想史の再考を促すほどに重い意味をもつからである。

本稿の末尾にあげたように、この注釈の文献史上の位置や、内容の一端、さらにまた著者の思想史上の特色については、これまでいくつかの研究がこれを取りあげ、論じている²⁾。筆者の目下の関心事は、先行するこれらの研究成果をふまえたうえで、同注釈の成立年代をいくつかの視点から、可能なかぎり絞りこむことにある。ここではしかし、紙幅の制約もあるため、成立年代を推定するための基礎作業として、『解説』をチベット大蔵経に編入するうえで大きな貢献をなしたプトゥン・リンチェンドゥブ(Bu-ston Rin-chen-grub, 1290-1364)と同注釈との関わりを考察してみたい³⁾。

II 『解説』に対するプトゥンの関わりを考えるうえでは、かれの生涯における以下の3つの時期を見のがすことはできない。すなわち、

1322年⁴⁾：『プトゥン仏教史』を著わし、最終第4章に訳経論目録を置く。同書においてプトゥンは、『入菩薩行論』には章立てと翻訳年代の異なる大小2本があり、当時、両者の相違を指摘する声が多くあったことを伝えている⁵⁾。またその注釈についても、『入[菩薩]行論』に関しては、インドでは100の注釈があるといわれているが、チベットでは[その中の]8つの翻訳のみが

ある」⁶⁾と言及する。最終章の訳経論目録によればしかし、ここで言及された8つの注釈文献の中に『解説』はふくまれていなかったことが分かる⁷⁾。

1334年⁸⁾：シャル寺にテンギユルを確立。『解説』の訳本はこの際に、プトゥンの手によって初めて大蔵経・テンギユルに編入されたと推定される。かれはこのときすでに『解説』をかなり重要視していたと見え、翌1335年のホル月5月に記載を終えた『テンギユル目録』の中では、『入菩薩行論』、およびプラジュニャーカラマティ作の『同論細疏』につづく位置にこの注釈文献を置き、またこれとは別に、『解説』の最終2章に相当するテキストの翻訳文献をも編入している。前者は著者名・訳者名を欠くが、後者については「書跋と訳跋のないもの」(mdzad byang dang/ 'gyur byang med pa gcig)⁹⁾と言及する。いずれにせよ『解説』は、このときすでに著者・訳者ともに不明であったことが分かる。なお、『解説』第8「般若の説示」章の現行諸版本にはいずれも錯簡があるが、『解説』の依拠した『入菩薩行論』の初期本(9章本)が敦煌出土チベット語写本の中に発見されたことにより校訂が可能となった¹⁰⁾。

1338年¹¹⁾：『入菩薩行論注釈「菩提心を照明する月光」』を著す。この中でプトゥンは、『解説』に部分引用される初期本(9章本)の訳文に言及しながら初期本と現行本のテキスト上の相違をしばしば指摘したり、あるいはまた『解説』の注釈内容に対して批判的なコメントを添えてもいる。この点は次節において詳論したい。

という3つの時期である。

これらの記述および事実は『解説』をめぐっていくつかのことを教える。つまり、

①『プトゥン仏教史』が作成された1322年の段階でアクシャヤマティという著者名をもつ9章立ての初期本『入菩薩行論』の存在は知られていたが、これに依拠する『解説』の訳本は確認されていなかったということ。次にまた、

②『解説』が大蔵経に編入されたのはプトゥンがシャル寺にテンギユルを確立した1334年の時点と推定されるが、その依拠する初期本の訳本の方は、けっきょく大蔵経入りを果たすことはなかった。現行のテンギユルには稀ではあるが、『入中論偈』や『集量論注』に見られるように、同本異訳であっても複数の訳本を編入させている例はある。これらの例に比較すれば、『入菩薩行論』の新旧両本の隔たりは量的にも内容的にもはるかに大きく、それぞれが依拠したサンスクリット写本も異なっていることが当時すでに知られていただけに、いかなる事情があっ

たにせよ、初期本の訳本が大蔵經に加えられなかったのは残念なことであった。しかし同時にまた、敦煌出土文獻の中に発見された初期本のもつ意味はそれだけに重いものがあるといえよう。さらにまた、

③プトゥンの時代にすでに『解説』の著者・訳者いずれもが不明となっていて、また初期本に依拠する『解説』に少なからぬ錯簡が見られるという事実は、それ自体、同注釈の著作年代および訳出年代のいずれの点でも、『入菩薩行論』の現行本（10章本）にもとづく他の注釈文獻に先行するであろうことをうかがわせてもいる。

Ⅲ つぎに、現行本に対するプトゥン自身の『入菩薩行論注釈』（1338年）における『解説』への具体的な論及を、最重要章ともいえる第9章の範囲内で検討してみたい。同注釈の奥書によれば、プトゥンはこの注釈を作成するうえで、『テンギュル目録』（1335年）に自ら掲げた7つの注釈文獻を利用している¹²⁾。したがってプトゥンは、スヴァルナドヴィーパ出身のダルマパーラが主要偈を抜粋して集成した『入菩薩行論要目』（P No. 5281, D No. 3879）と『同論三十六要目』（P No. 5280, D No. 3878）をのぞいて、シャル寺に大蔵經を確立する際に収集した実質的にすべての注釈文獻を参照していたことになる。ところで、奥書での『解説』への言及は、『9章立て入〔菩薩〕行論の注釈』の後半（sPyod 'jug le dgu ma'i 'grel pa'i smad）¹³⁾と出るが、ここにいう後半（smad）というのは、おそらくは新旧両本の内容が大きく異なる現行本（10章本）の第5章から第10章相当部、つまり初期本（9章本）に依拠する『解説』の第4章から第9章までをさすと考えられる¹⁴⁾。

さて、プトゥンが『入菩薩行論注釈』の第9章の中で『解説』に言及あるいは論及するのは以下の5箇所である。（ここでは紙幅の制限もあるため、部分引用にとどめる。）

①〔現行本・第3偈に対する注釈内で〕「ある者、つまりインドの注釈（細字）、が通常人（prākṛtaka）を経量部に、そしてヨーギンを唯識派以上の者に結びつけ¹⁵⁾、またある者、つまりツァン（gTsang）〔ナクパ〕（細字）、が通常人を教えに趣入していない者（bstan pa la ma zhugs pa）として、そしてヨーギンを〔教えに〕趣入した者として説明しているのは、妥当でない。その両者に関して順次に二諦が設定されたのではないからである。」（Dza 163b7-164a1）と述べ、『解説』の偈頌解釈を批判する。

②〔現行本・第31偈（＝初期本・第23偈）以降の構成理解について〕「『9章立

て入[菩薩]行論の注釈』では、これ以前で対象としての二諦を確定したのち、これ以後二諦のヨーガの修習を説明し、」（171a1-2）と言及する。

③〔現行本にない初期本・第 33 偈にふれて〕「『9 章立て入[菩薩]行論の注釈』には、「もしも〔大乘と小乗は〕相互に矛盾している」云々という一偈があるが、インド写本および他の諸注釈の中にはない」（175a3）という。つまり、かれが手にしたインド写本、つまりサンスクリット写本もまた初期本系ではなく現行本系統のものであったことがわかる。

④〔現行本・第 60 偈のあとに、『解説』には、他の注釈にない 5 つの偈頌（初期本・第 40-44 偈）が出ることにふれて〕「『9 章立て入[菩薩]行論の注釈』には、このあとに思考機能（意）と三時の心、つまり識蘊と、十八界と、心作用（心所）とが私（aham）ではないという、結論をともなった論証と、サーンキヤ派とヴァイシェシカ派の私（puruṣa ないし ātman に相当）に対する論駁をともなった否定が出るが、他書には見られない」（178b2-4）と語る。

⑤〔現行本・第 152-155ab（初期本・第 85-88ab にほぼ相当）の 3 偈頌半およびそれ以降の偈頌の位置づけについて〕「『9 章立て入[菩薩]行論の注釈』では、3 偈頌半は空性を考察することの得益を、それ以降は執着を対治するものとしての解脱の方便を説いているとたしかに説明するのであるが、〔プラジュニャーカラマティの〕『大註』とヴィブーティ〔チャンドラ〕は、愚か者は真実を知らないから、〔真理でないものを〕真理であると増益して執着することによって、自らが自らを苦しめるのであるが、悲心により、かれらが苦しみを静めるために、誓願をおこすと説明しているのであるから、その理趣で説明するなら、」（200b1-2）云々と語る。

プトゥンが第 9 章の注釈内で『解説』に言及するのは、以上の 5 箇所である。その内容は、おおよそ初期本と現行本のテキスト上の相違の指摘（③④）、『解説』の偈頌解釈の紹介と批判（①）、『解説』と他の注釈との間にみられる『入菩薩行論』本頌の構成理解上の相違に関する言及（②⑤）、に分類される。限定された資料であるとはいえ、ここには『解説』に対するプトゥンの基本的な姿勢をうかがい知ることができる。ただしこれらの引用は、①内の細字注が、『解説』をインドの注釈であると明言している点をのぞいては、同文献の成立に関して直接の情報を伝えるものではない。したがって目下のところ、『解説』の成立および翻訳の年代に関してプトゥンが教えるのは、先のⅡに指摘した諸点に概括されるといえる

であろう。

- 1) Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i mnam par bshad pa ['i dka' 'grel] (**Bodhisattvacaryāvatāra*vyākhyāna[-pañjikā]) : 著者および訳者不明。P No. 5274, D No. 3873, N No. 3265 : -mnam par bshad pa'i dka' 'grel (*-vyākhyānapañjikā) と P No. 5279, D No. 3877, N No. 3270 : -mnam par bshad pa (*-vyākhyāna) との2つのテキストが編入されているが、後者は実質的に前者の最終2章と同じ。2) 斎藤 [1996b] pp. 591-593; 思想上の特色については同 [1997a] [1997b] 参照。3) プトゥンと、『解説』が依拠した初期本そのものとの関連については、Saito [1997c] 参照。4) 西岡祖秀『プトゥン仏教史』目録部索引 I』『東京大学文学部・文化交流研究施設紀要』4, 1980, p. 63, n. 1を参照。5) 斎藤 [1986b] pp. 80-82。6) *The Collected Works of Bu-ston*, part 24, Śatapitaka Series, vol. 64, Ya 115b3。7) 斎藤 [1986b] pp. 95-98。8) 羽田野伯猷「チベット大蔵経縁起〔その一〕—ナルタン大学問寺の先駆的事業をめぐって—」『鈴木学術財団研究年報』3, 1966, pp. 42-50 参照。9) *The Collected Works of Bu-ston*, part 26, Śatapitaka Series, vol. 66, La 90b4。10) 江島 [1966] pp. 192-193; Saito [1993] pp. 61-65; 斎藤 [1994a] pp. 136-137 (n. 28)。11) プトゥンの『入菩薩行論注釈「菩提心を照明する月光」』末尾に置かれた「釈迦比丘リンチェンドゥプが、多般(=戊寅, 1338)の年、嘴宿月(=ホル歴11月)17日に完成して」(*The Collected Works of Bu-ston*, part 19, Śatapitaka Series, vol. 59, Dza 211b5)という奥書の記述による。12) See Saito [1997c] pp. 80-81, n. 9。なお、同論文内の“Bu ston refers to the names of six commentaries...” (p. 80, ll. 2-3) という一文の six は seven が正しいのでこの場を借りて訂正しておきたい。13) *The Collected Works of Bu-ston*, part 19, Śatapitaka Series, vol. 59, Dza 211a2。14) 斎藤 [1996b] p. 593 参照。15) 斎藤 [1997a] pp. 881-883 参照。

Bibliography (『解説』に關説する著作・論文のみ。[発表年代順])

- 江島恵教 [1966]: 『入菩薩行論』の注釈文献について』『印度学仏教学研究』14-2, pp. 190-194.
 Pezzali, A. [1968]: *Śāntideva, mystique bouddhiste des VII^e et VIII^e siècles*, Firenze.
 斎藤明 [1986a]: 「Akṣayamati 作・異本 *Bodhisattvacaryāvatāra* について」『日本西蔵学会会報』32, pp. 1-7.
 — [1986b]: 「敦煌出土アクシャヤマティ作『入菩薩行論』とその周辺」『チベットの仏教と社会』(山口瑞鳳監修) 春秋社, pp. 79-109.
 若原雄昭 [1990]: 『入菩薩行論』の大乗佛説論』『龍谷大学仏教研究室年報』4, pp. 45-54.
 Kajihara, M [1992]: “On the *Pariṇāmanā* Chapter of the *Bodhicaryāvatāra*”
Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū, vol. 40-2, pp. 1059-1062.
 Saito, A. [1993]: *A Study of Akṣayamati (=Śāntideva)'s Bodhisattvacaryāvatāra as Found in the Tibetan Manuscripts from Tun-huang*, Research Report of the Grant-in-Aid for Scientific Research (C), Mie University.
 石田智宏 [1993]: 『*Bodhicaryāvatāra* における波羅提木叉と懺悔法——改編と改訳の証跡

- 『仏敎史学研究』36-2, pp. 1-27.
- 斎藤明 [1994a]: 『『入菩薩行論』の謎と諸問題——現行本第九「知恵の完成（般若波羅蜜）」章を中心として——』『東方学』87, pp. 136-147.
- [1994b]: 「初期本『入菩薩行論』にみるシャーンティデーヴァの思想——第8「知恵の説示」章を中心として——」『東海仏敎』39, pp. 98-144.
- 石田智宏 [1994]: 『『入菩提行論』における勝義と世俗——瑜伽行者の階梯——』『日本仏敎学会年報』59, pp. 25-36.
- 斎藤明 [1996a]: 「中観思想史におけるシャーンティデーヴァの位置をめぐって」『宗教研究』69-4, pp. 173-175.
- [1996b]: 『『入菩薩行論解説細疏』のシャーンティデーヴァ理解』『今西順吉教授還暦記念論集・インド思想と仏敎文化』（藤井敎公他編）春秋社, pp. 582-594.
- Ishida, Ch [1996]: “Action and Result in the *Bodhicaryāvatāra*”, *Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū*, vol. 44-2, pp. 953-958.
- 斎藤明 [1997a]: 『『入菩薩行論解説細疏』の思想的立場をめぐって』『印度学仏敎学研究』45-2, pp. 877-883.
- [1997b]: 『『入菩薩行論』新旧両本における自我批判』『日本仏敎学会年報』62, pp. 49-62.
- Saito, A. [1997c]: “Bu ston on the *sPyod 'jug* (*Bodhisattvacaryāvatāra*)”, *Transmission of the Tibetan Canon* (Proceedings of the 7th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Graz, 1995, vol.III) Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Denkschriften, 257. Band, Wien, pp. 79-85.
- Williams, P. [1998]: *The Reflexive Nature of Awareness: A Tibetan Madhyamaka Defence*, Curzon Press: London.
- Saito, A. [2000]: *A Study of the Dūn-huáng Recension of the Bodhisattvacaryāvatāra*, A Report of Grant-in-Aid for Scientific Research (C), Mie University.

（平成9-11年度文部省科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）による研究成果の一部）

〈キーワード〉 プトゥン, 『入菩薩行論解説〔細疏〕』, 『入菩薩行論』

（三重大学教授, Ph. D.）